



刺激X玩具+着衣=漏+濡

〜教室で初オニー〜

織部ユイ

2024年6月28日 15時16分

『……興味本位で媚薬なんて飲まなければよかった……』

私は兄が持っていた媚薬を興味本位で使ってしまった。

なぜ兄が持っていたかは謎だが、今はそんなことはどうでもいい。

この疼きを鎮めることが最優先だ！

うっ

『媚薬のせいでおま〇こが欲しがってる！』

『……少しだけ……ほんの少しだけ……』

『私もこんなものを持ってきているなんて……大概変態なのかも……』

私は自分で自分に呆れながらもま〇こに挿入していた。



『集会抜け出してきちゃったけど、大丈夫…だよね…』

ううっ

色々と心配事はあるものの、体は勝手に動いている。
不安なことを思い出すたびにま〇こが疼き、
それがさらに快感を呼んでしまうのだからタチが悪い。



『みんなが授業を受けている教室でオナニーしちゃってるっ……』

うっ

んんっ

はっ

はうっ

シュッ
ン

シュッ
ン

『みんな帰ってきちゃう……
うう、焦ると余計気持ち良く……んっ……
やばい、やめられないっ……』

やめなきゃいけないとわかってはいるものの
見られるかもしれないと言うハラハラ感と
媚薬の効果も重なってなかなかやめられないでいた。

『誰かの足音が聞こえたような……!』

足音が聞こえたせいで私は余計に興奮してしまった。

見つかったら学校生活が危ぶまれる危険と隣り合わせなこの状態に興奮せずにはいられなかった。

『……やめなきゃいけないのに腰が勝手に動いちゃう!』

『……見つかったら……!』

んあっ

んっ

イっ

ドキ

ドキ

『……ドキドキして……』

これまでのどんなオナニーよりも気持ちいい!

教室でイっちゃう!……だ、だめっ……!』







ガッパッ

『気持ち良過ぎておしっこが止まらない!』

ガクガク

ドキ

ドキ

『人が来る前にやめなきゃいけないのに!!』

焦れば焦るほど、溢れ出してきてしまう。

今まで感じることのなかった快感を得ながら

早く止まってくれと願っていた。

ゼッ

『何とかロッカーに隠れることができた……
でもどうしよう、お漏らしそのままにしてきちゃった!』

男子たちが私のおしっこを片付けているところを見ていると
ま〇こが再び疼きだしてきた。

何これ？

誰か水でもこぼした？

ちょっと色ついてるぞ？

独特な匂いだねえ！

『うっ、恥ずかしいのだった、また気持ち良く……』

や、やめられない……………

イッ、イク……………

あっ、あんっ!……………んっ!……………んっ!……………!』

男子が片付け終わるまでの間、私の手は終始陰部を弄っていた。

織部ユイ

2024年8月19日 17時30分

はあっ

はあっ

あっ

『ここまできたけど……もう限界！』

脚がガクガクするし……トイレにも行きたいっ!』

ク
ク
ク
ク

「もう限界かも！お願いだからトイレに行かせて！」

「声を出しちゃダメって言ってるのに……」

「……ちようど外だしここですしちやいなっ！」

はあ

はあ

うっ

こんな格好をさせられて、それだけで恥ずかしさは限界なのに
その上、外で放尿なんて考えただけで悶絶ものだ。

グ
グ
グ

「うう、絶対にこんなところだとするとか嫌！」

「そんなこと言ってもぎつきからちびってるじゃん！」

もしかして気が付かなかったの？

歩いてきた跡がくつきり残ってるよー！」

「それと俺の言うことは聞かなくちゃね！」

「全校生徒にあの恥ずかしいオニー写真を見られるのがいいか、それとも俺一人だけに恥ずかしいところを見られるのがいいか選んでいいよ！」

うず・うず

『……………わかった……………でするっ……』

私は全校生徒に写真をばら撒かれてしまった時の恐怖と尿意に負けてしまった。





「おち出てる出てるっ」

じゅん

『うん、恥ずかしすぎないー』

じゅん

ドロドロ

ニヤ

ホタ

ホタ

「因みに、隠しててわからなかったと思うけど、
このお漏らしシーンも超小型カメラで録画してあるからねえ！」

『エッ』

突然明かされた事実と恥ずかしさから目の前が真っ白くなっていく。

はあ

はあ

うっ

ぐすっ

ガク
ガク
ドゥッ

ウザッ

キョロ

「しっかりぶちまけてスッキリしたみたいだし、今日は帰りましょうか！
とんどこでまたよろしくっー」

『……………うっ……………は……………ら……………』

あまりにもショッキングな出来事が重なり、私は頷くことしかできなかった。

「ザーメン布団の上で耐久バイブ」
織部ユイ

2025年3月26日 16時13分

男子にメイド服のまま寝かされた。
男子が準備した、そのドロドロとした物体が
時間が経つにつれ、服の中にまで侵食してくる。

うっ

んあっ

ぐっ

んんっ

『精液が服の中にまで入ってきて、ドロドロ感が伝わってくる……』



嫌でも肌で感じ取れてしまうヌルヌル感と異臭が頭をおかしくする。
しかし、嫌だとは思いつつもバイブによって気持ち良くなってきたら
ことに気がついた。

『臭いの……バイブのせいで……気持ちいい……』

普段味わったことのない感覚に徐々に思考が停止していく。
嫌悪は次第に快感に変わっていた。

んんっ

んんっ

グザッ

頭では気持ち良くなりたくないと思っているが、

体が言うことを聞いてくれない。

私は必死に体の疼きをこらえるが、

こらえようとすればするほど快感が体を包み込んでいく。

そんな葛藤をしているうちに体の疼きが最高潮を迎えているのを感じた。

『男子の精液まみれで興奮してイっちゃうなんて嫌っ!』

何も考えることのできなくなってきたら頭の途中でそんなことを思いながら、私は絶頂を迎え、遂に漏らしてしまった。

『……こんな状態でイっちゃうなんて……』

んあっ

うっ

『……あつ、またきちゃう』

頭の中ではダメだと思っただが、

体と心は正直でいとも簡単に2度目の絶頂を迎えてしまう。

んんっ

結局、私はこの状態であと3回男子の前で噴水ショーをすることになる。



織部ユイ

2025年4月20日 16時00分

いっ

ズ
ズ
ズ
ズ

我

意識が飛びそうな中、解いてくれるのを信じて待つしかなかった。

『股間が引き裂かれそう……い、痛いっ！』

（五分後）

座らされて5分が経過したが一向にほどこしてくれる気配がない。
というよりも人の気配が全くしないのだ。
快樂というよりも痛みによって私は何度か漏らしかけていた。

『も、もう限界っ！』

『……さっきから何度もちびっちゃってるしっ！』



（六分後）

「お願いしますっ！ほどこいてください！誰かつ！返事をしてっ！
お、おねがい……お……おねが……ら……」

ド
ド
ド

ド
ド
ド

ド
ド
ド

ド
ド
ド

ド
ド
ド

んくっ



「七分後」

『なんで誰も返事をしてくれないの……』

いつ解放されるかわからないまま激痛と戦うには、私にとってとてつもなく辛かった。
そして、頭が真っ白になっていく。

拘束されてから7分が経過した頃、尿意と痛み、恐怖、

そして我慢していてももう仕方がないからという思いから私は我慢することをやめてしまった。

はあっ

ぴくっ

あっ

ビクッ
ビクッ

ジョー

ニャー

ジョロロ

『お股がおかしくなっちゃう………も、もうやだっ………』

あんっ

「一時間後」

「はい、終了です！」

「……あれっ？返事がありませんねえ！」

「これは結構悲惨な状態だね！」

「これじゃあ、今日の体験はこれで終了しかないですねえ！」

「仕方ないので、今日やるはずだった他の体験は明日に持ち越しです！」

はあっ

ひん、

ドクッ

パッ

ショロ

「……………」

「……………」

はあっ

っ

「無垢な子供のおもちゃになる」

原山紗枝

2025年10月19日 17時30分

私が目を覚ました時には、

パンツの中にバイブが挿入された格好でベンチに縛り付けられていた。

『うそっ！なにこの格好！』

えっ

幸いにも周りには子供が多かったが、大人の姿はなかった。

『誰かに助けてもらえない……か……』



「お姉ちゃん、どうしたの？何かの遊び？」

パンツ丸出しなおかしな格好に興味を持ったのか男の子が話しかけてきた。
突然現れた救世主に私は内心ほっとした。

「……監禁ごっこ……かな？」

よかったらこの縄をほどいて欲しいんだけど……できるかな？」



私は安心して、息を吐いたが
それはひとときの安らぎだったことを思い知らされる。

「このリモコンなんだろう？」

この変なマークのボタンって何かな？」

「それは押しちゃだめなやつっ！」

あっ



男の子の手によってバイブにいきなり電源が入り、体が反応してしまう。
バイブがま〇こに刺さっているだけという
焦らされていたのと変わりないこの状態で急に動き出したのだから仕方がない。
もともと熱を帯びやすい体の私にとって
この状況事態が興奮材料になり得るものだったのだ。
刺激を欲しがっている身体にバイブの振動が加えられたことで
さらに一層体が火照っていく。



一刻も早く、電源を切ってもらわないと解放されるまでイキ地獄必死だ。



「ボタン?のたす?のボタン?なのかな?」

んっ

「そのボタンを押して…んっ……………電源を切ってくれる?」

ずずっ

グググ

男の子は躊躇することなく、振動を増幅させていく。

「お……ね……がい……んっ……」

でんげ・あんっ……んんのボタンを……おしてっ……」

んっ

はっ

ズ
ズ
ズ
ズ
ズ

あんっ

「お姉ちゃん、どうしたの？この『たす』のボタンがいいの？
もっと押してあげるっ！」



『この子、完全に私で遊んでる……!』

はあ

はっ

キゅんっ

うざッ

はい

ズグ

男の子は緩急をつけた操作をする。

わかってやっているとは思えないが、それによって私の体は火照らせていく。

体が疼き、快感を覚える。

絶頂を迎えそうになる絶妙なところで男の子はパイプを止める。

そうすると気持ち良さが頭に残ったままになる。

その繰り返しがよし一層ま○この疼きを加速させた。



はあ

んくあ

ドキ

ズッ

んっ

んっ

公園のベンチで、子供によって行われている羞恥プレイに私は陶酔し始めていた。

はあ

んっ

.....あつ、何か大きいのがきちゃうっ！あっつやばいっ！』

あっ

あんっ

ナ
エ
ジ

上
下
上
下

今まで溜まっていた欲求が吹き出したかのように
バイブが刺さっていた割れ目から大量の潮が吹き出した。

「もういくの嫌だっ！頭がどうになっちゃうっ！

早く…はやくバイブを止めてっ、縄を解いてっ…。」

「楽しいからもうちょっと」

はあ

ゼッ
ッ

はあ

んっ

ゼッ
ッ

ドロ
ー

お
し
り
を
ぬ
ぐ
る

しかし、この縄をほどいてももらえることはなく、
バイブが止まったのは男の子が十分に楽しんだ後だった。
奮闘むなしく、その後私は5回もの絶頂を繰り返すことになってしまった。

「神社存続の為、身を粉にして働きます」

織部ユイ

2027年5月22日 16時30分

『さっきから生暖かいものばかりかけられて……変な感じ……』

んんっ

ぽろっ

ドロー

実家の神社が金欠のため、

苦肉の策として男性の性欲処理事業を行うこととなった。

最初は兄の突拍子も無い案に苦言を呈したが、

お金には変えられないと止むを得ずに実行することになってしまった。

一回
下縁

先ほどから数人の参拝客から液体をかけられているが、抵抗せずにただかけられるだけというのも変な感じがた。

「兄ちゃん、トイレにも行きたくなってきたし、もうやめようよー」

下半身が露わになっている為、流石にトイレにも行きたくなってきた。

「もう少しだけ、やっていこう!...頼むっ!」

「.....うん.....わかった.....」

下縁
処刑



「参拜者に喜んでもらえるようにサービスしようっ！」

兄はサービスに託けて私にパイプを装着させた。
慣れた手つきで、あまりにもあっさりとつけていたので抵抗する暇がなかった。
ザーオンをかけられていたこともあってパイプもすんなりと入り、
気づいた時には、パイプの入ったお尻を突き出して
ぶっかけを望んでいる淫乱巫女が完成してしまっていた。

はあ

はっ

ズンッ

グザッ

ドゥン

「えっ、なにこれっ!?
パンツで押されてっ!.....んっ.....!」

突然のことで驚きはしたが、今まで精液をかけられ続けていたおま○こは
パイプの振動と共にビクビクと感じ始めてしまっている。



「更にサービスでこれも追加っ！」
参拝者もお喜びだよっ！」

さらに兄のサービス心もとい遊び心はピーアァン〜♪

「お尻まで！だめ、お尻はだめっ！」

どろろ

はあ

がく

グググ

ズッ
パッ

ひいっ

ドゥッ

普段絶対に入ることのないお尻の穴に異物が入ってくる初めての感覚に
息苦しさを感し、腹部が苦しくなってきた。

「んんっ、お腹が苦しいー」

「ほらお客様だよー笑顔えがおっ！」

「どうぞ、思う存分かけていってください♡」

苦しさで恥ずかしさで泣きたい中、無理矢理に笑顔を作った。

んっ

ギュッ

ペタッ

グググ

こんなお尻を突き出している格好、

しかもパイプとアオルビーズ付きな無様な格好を

周囲の人に見られている。

その事実が恥ずかしさと共に気持ち良さも感じさせる。

そして尿意も相まって、お尻が小刻みに震えているのが自分でもわかった。

『おなかも苦しいし、あそこもパイプでかき回されてウズウズしてる……
そろそろやめないと限界来ちゃうっ！』

ヒューン

「兄ちゃん、そろそろ……って、なんで振動強くなるの!?
おっきからギリギリって言ってるじゃんっ、んっ……」

はあ

はあ

ひっ

ズン
ズン
ズン

ハイッ

処理一回
下縁



ぶっかけられて更に行くところまで見せるなんて絶対に嫌っ!」

ぶる

2

くあ

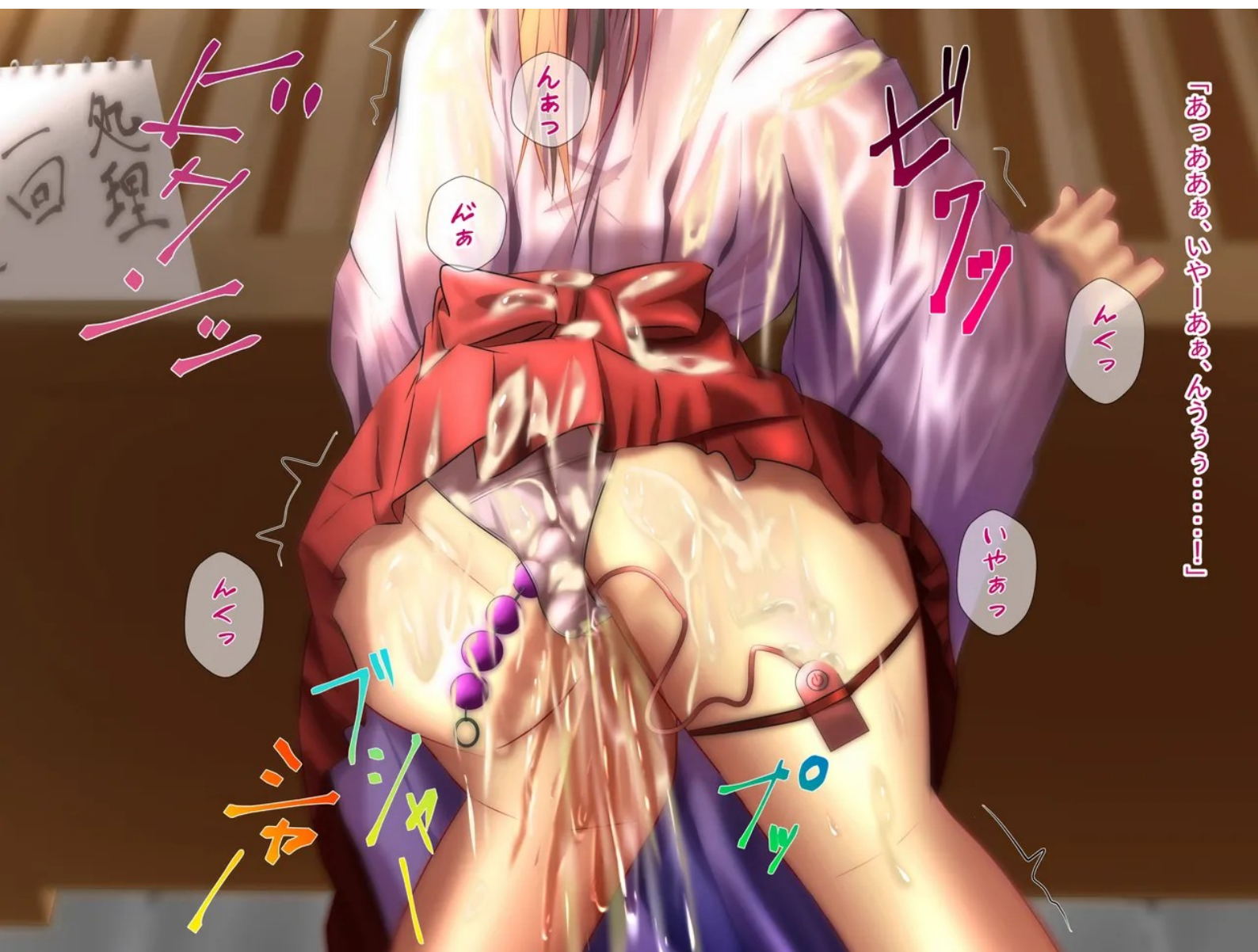
はあ

足も震えてきて、自分がひどい格好をしていることがとにかく気持ちいい。

今までは理性で押しとどめていたが、今となっては快楽も伴って理性のリミッターが弱くなってしまっている。

『うっ、お腹がゾクゾクするし、尿意が……』

おしつがすぐそこまで……きてる……うっ……うっ……うっ……」



「あっあああ、らーやーああ、んぐっ……」

んぐっ

いやあっ

んあっ

んあ

んぐっ

ゾッ

ゾッ

ゾッ

ドッ

処理
回

『う……う……う……』

ぶっかけられるだけならと思って始めたことが、
お漏らしまで晒してしまふことになるとは思わなかった。
穴があったら入りたいとはまさにこのことだと実感した。

今思えば、

お尻を出してぶっかけられるとういう行為自体おかしかったのかもしれない。
私の人生、こんなことばっかりだった気がする。

はあ

『今日は結構稼げたぞっ！』

また、お金がなくなったら頼むなっ！』

はあ

毎回嫌だと思いつつも流されてきた私のことなので、
今後も流されてしまう可能性は高そう……かも……

ホタ
ホタ

「オナニーランニング」

原山 紗枝

2028年8月10日 13時17分

人前で絶頂する快感に私は酔いしれていた！
以前、公園でいく感覚を得てからというもの、
普通のオナニーでは物足りなくなってきたしまっている。
そのため、自分から人前に出て醜態を晒すことで
快感を得るようになってしまった。

今日は人通りもまばらでベレる心配が少ないのと適度な刺激が得られる為、
絶好のオナニーランニング日和である。



軽くイッては収まりを先ほどから繰り返している。

繰り返すに連れ、快感が増していつているのが自分でもわかった。

『この何度もいく感覚がたまらない』



そろそろ誰かに見つかってしまうかも……
そう考えると……キュンキュンするっ！

「やばいっつ、でるっつ！」

はあっ

んっ

きゅんっ

きゅんっ

うわ
ザッ
チョロッ

パンツとランニングウェアに、愛液とおしっこが染み込んでできてしまっている。
絶頂が訪れるたびにパンツの中のヌルヌルが増してくる。
それが人前でイッている実感に変わりさらに快楽を伴う。



再び絶頂が訪れ、今までとは比較にならないような快感が全身を襲った、
その瞬間、今まで溜めていたものが一気に溢れ出してきた。



この感覚、めっちゃくちゃ気持ちいいーやめられないうっー

あん

はあ

ああ

くっ

香
ロ

シ
ャ

私は脳に分泌されるドーパミンによってとてつもない快感を得ていた。
足をガクガクさせながら走っている様子は明らかにおかしい。
そしてよく見れば、液体を垂れ流している。

そんなギリギリなスリルを求めているおかげで絶頂時の快感は凄まじい。

んあっ

んんっ

ウッ
グッ
ッ



人が来るたびにゾクゾクする！

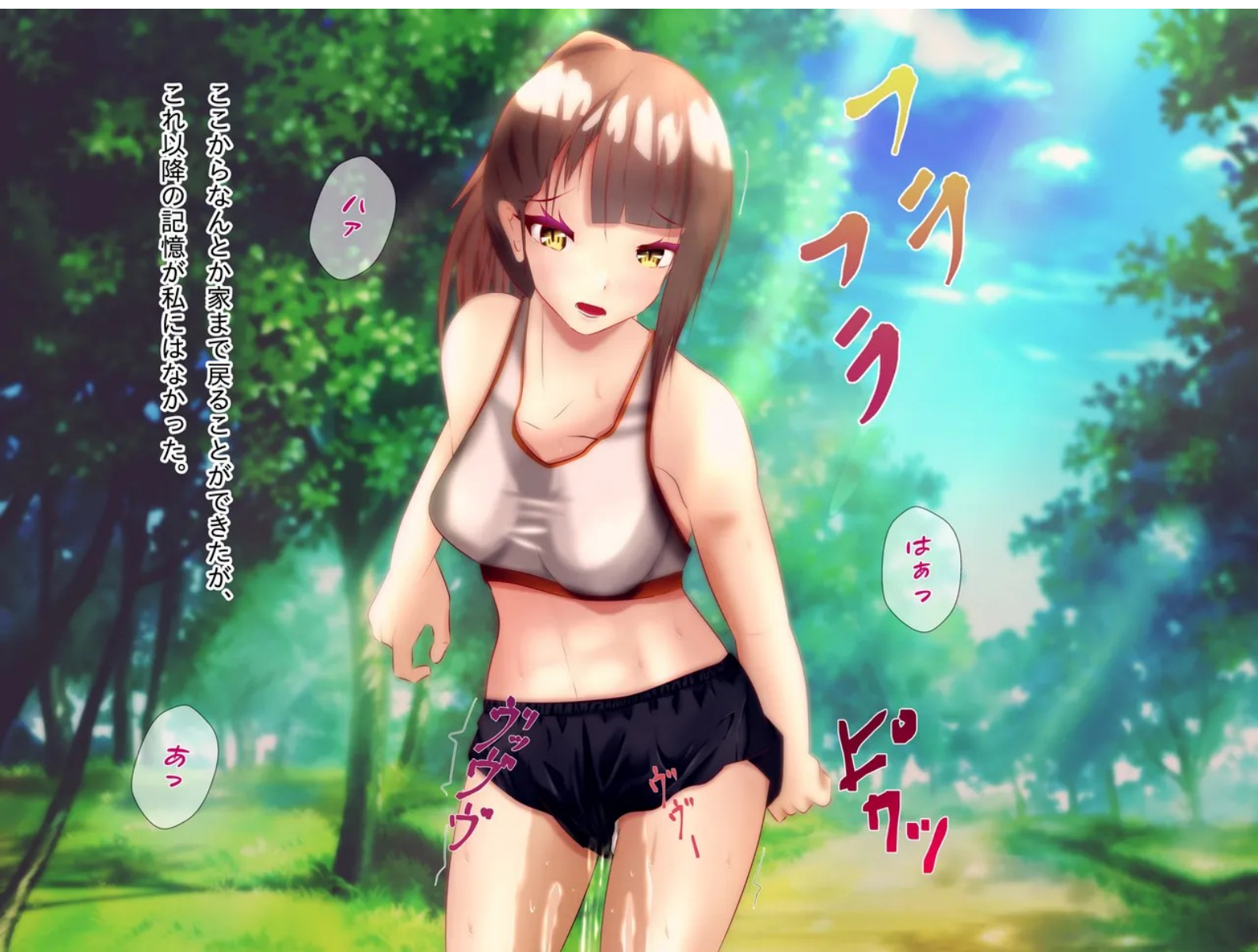
そうしているうちに我慢できないほどの快感に再び襲われた。

意識が飛ぶような強烈な感覚に

またしてもパンツの中ですごい勢いでおしっこが発射された。

「ぎ、気持ちいい……」





ここからなんとか家まで戻ることができたが、
これ以降の記憶が私にはなかった。



「一部は第二部……おまじですが……つくっ♡」

これ以降は第二部になります！
もう少しあります。是非楽しんでくださいね！

「ザーメン弁当をどうぞ」

織部ユイ

2025年3月26日 15時00分

何でメイド服なの？

「その方が萌えるでしょ？
メイドさんに一回アーンしてみたかったんだよね！」



は、はあ……

してもらったじゃないんだ……

「ということで、お弁当持ってきたから食べてねー！
嫌がったらわかってるよね？」

う、うん……

お弁当を食べるくらいなら……



「はいこれー!」

えっ

はっ?

えっ

ドン!!





こ、これが練乳？
ま、まじ？
普通の弁当じゃないの!?

「フルーツだよ！
ちゃんとさっき練乳かけてきたばかりだから」



うっ、匂いがっ！

フルーツの甘い香りと混ざって
……生臭い匂いがするっ……

うっ



「生臭いとか失礼だねー！
さっき絞ってきたばっかなんだから！」

練乳は加工品だから……！
しぼりたてとかありえないんだけど……

「まあ細かいことは気にせず、
食べて食べて！」

これ絶対…あ、あれでしょ…？
やだ、食べたくないっ！

どろっ





「わからない子ですね〜！
これは練乳だよ。いい〜!?
今後、聞き分けがなかったらすぐにあのこと
バラしちゃうからねー！」

「言ってごらん、これは何ですかあ〜？」

……
れ、練乳……です……

びすっ



うっ

……アーン……

うう、ヨイツのなんて
食べたくないのに…

「よくできましたー！
それじゃあアーンして〜」





甘いのと苦いのが...

なにこれ、不味すぎ！

じゅぽっ

じゅぽっ

「ほんじゃあ次は二つ同時に行くよー!!」

待って!

私、そんなに食べられない!

さっきの一つで胸の辺りがドロドロしてるの!!







んっ

あつ、口から吐てきちゃっ...

もどもど



うう、飲み込めない……

んっ

んっ

もぐもぐ

もぐもぐ



んっ、何とか飲み込めた！

ゴッ





うぐっ

うー、気持ち悪いよお！
うぐっ、吐きそう……！

「それじゃ次いくねー!」

ちよ……ちよっと待って!
……ごめんなさい。もう無理かも!

フルーツとせ、…練乳が混ざって
お腹の中がおかしいの!
これ以上食べたら吐いちゃう!





「ええ〜〜！
……どうしてもダメならちゃんと『お願いします旦那様！』
って頼んでみて！
そうしたら考えてあげてもいいよ。」

えっ！

んんん

「ごっごっごっ」



お、お願いします、だ、旦那様！
これ以上は食べられません！

「おお、かわいいねえ。
わかった、そこまでいうなら別の遊びをしようじゃない！
ちよっと準備するから待っていてねー！」



「準備できたよー！こっちなあ」

メイド服汚しちゃった……！
これコイツの……じゃないよね？

持ち主さん……
ごめんなさい……………

♪授業中はローターをつけましょう♪

Ⅱ1限終了したら外していいですよⅡ

織部ユイ

2024年8月30日 14時25分

『男子に精子をかけられて、その上お漏らしちゃうなんて……』

んっ

あんっ

『パイプの振動を変えられると……んっ……気持ちいい……』

ウン

ブッブッ

〜6限目体育の後は放課後バイブ〜

Ⅱ一時間耐久テストⅡ

織部ユイ

2024年9月2日 17時5分

い
や
っ

は
あ

ビク
ッ

ビ
ク
ッ

は
あ

ビク
ッ

ム
ム
ッ

「もう……限界っ！……子宮が振動でおかしくなっちゃうっ！」



くお漏らしいただきますく

織部ユイ

2029年6月21日

21時35分

「それ舐めてもいい？」

「いいよっ！」

舐めたらいうことなんでも一つ聞いてくれるんですよ、
兄ちゃんっ！」





























